

## 外来植物への対応

沖縄県ではいたる所に外来植物が繁茂して景観を損ねているが、この現状認識と改善のために琉球大学で授業を行った。驚いたことに、ほとんどの学生が非常に多くの外来植物の種が、それも大量に繁茂していることを認識していなかった。外来植物が問題視される機会が少ないことが一因と思われる。

外来種という外国産の生物と考えている人が多く、国内外来種について理解している人は少ない。例えば、伊江島の野生のテッポウユリを石垣島に植えたら国内外来種になる。こうすると地史的、生態的変遷で育まれた伊江島産の特徴が同様に育まれた石垣島産の特徴に交雑を通して浸透してしまう。言い難いことを敢えて述べるが、伊江島産のテッポウユリを他の島々に持ち込んで植えることは生態系保全の観点から推奨できない。善意のボランティア活動で花壇などに植物が植えられるが、綺麗だから、育てやすいからといった理由だけではなく、逃げ出して生態系に悪影響にならないかについて慎重に検討する必要がある。また、調達の難があるとは言え代替在来種があるにも関わらず公共工事で外国産のセントオーガスチングラス等が当たり前の様に植えられている。この現状は早急に改める必要がある。沖縄には美しい花をつける等で植栽に適した植物はいくらでもある。一方、私たちは外来種の野菜・果物、家畜、ペットの恩恵を受けている。外来種がいけないのではなく、自然環境に負荷をかける外来種が問題になることを確認しておかなければならない。

沖縄県の主要産業である観光、農業では亜熱帯の自然環境に直接的に向き合うことになるが、土木・建設業でも工事後の植栽等で自然環境に接する機会が多い。県内の全ての産業が直接・間接的に自然環境と関わりを持っていると言ってよい。自然環境の保全には、また自然環境を学び楽しむためには、県民の全てが在来・外来生物の知識を深め、特にこれまで問題視されることが少なかった外来植物についても注意する必要がある。私は県内の大学においては学生の全てが、沖縄の生物についての基本的な情報を授業で学ぶべきと考えている。とりわけ教育学部等の児童・生徒の教育に与る者には必須と考えている。

最後に外来植物の代表格のギンネムの駆除方法について付記したい。他の外来木本にも適用できる。茎の直径が1 cm以下の株は手で、それ以上の株は重機で引き抜くことができる。大きな株の手軽な駆除方法として地際から20-30 cmで幹を切り、切断面に除草剤の原液を塗ることを勧めたい。一回で枯れることは少ないが、幹を切り詰めて2回か3回繰り返すと駆除できる。